

2024年 2月10日

# かわち野に吹く風

東大阪文化財を学ぶ会

会報155号

会 長 南 光弘

## 知られざる「古代吉備」をさぐる ～鬼ノ城と吉備津神社の謎とは～

実施日 3月 2日(土) 雨天決行

1. 集合時間・バス出発 午前7時45分 ※遅れないようにお願いします。(090-8375-9655へ)
2. 集合場所 東大阪商工会議所前(河内永和駅すぐ、旧東大阪市立市民会館前)
3. 費用 6000円(大型バス、マイクロバス、高速道路通行料、保険料等を含む)例会終了時に精算
4. 昼食 各自弁当持参ください。(竜野西パーキングでも購入可)
5. 講師 南 光弘(歴史案内人) 備中高松城跡・資料館ボランティアガイドさん
6. 申し込み 大型バス(定員)を予定しています。是非、同封のハガキにてお申し込みください。  
定員オーバーの際は申込葉書、E-mail、LINE、ショートメールなどでの受付、先着順とします。  
E-mail minamifx56a1212@dune.ocn.ne.jp ショート mail 090-8375-9655  
※何れも、複数申込でも結構です。E-mail、LINE、ショートメールで申し込まれても葉書は投函しておいで下さい。誘い合ってご参加下さい。

### 7. 行 程

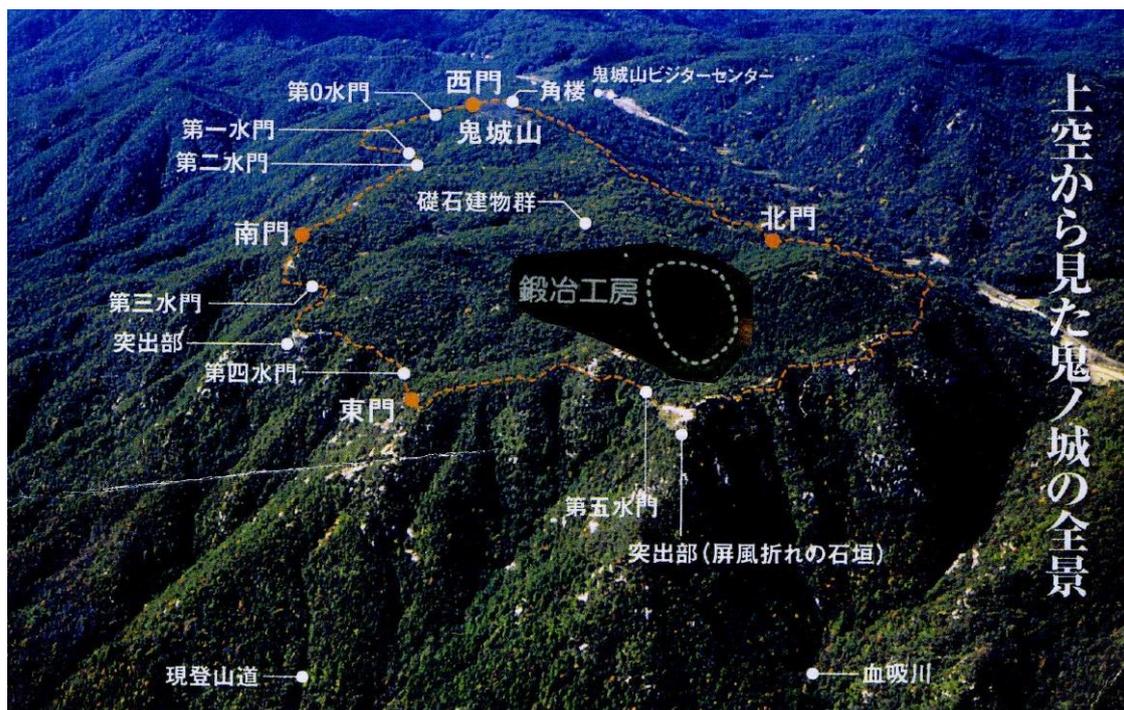
東大阪商工会議所前→鬼の城(角楼⇄南門)→(昼食・砂川公園)→吉備津神社・鳴釜神事見学→楯築弥生墳丘墓→造山古墳→備中高松城跡・資料館→帰阪7時を予定 ※都合により見学先を変更することがあります。ご了承ください。

独自の文化を築いていた古代吉備には、弥生後期のヤマトの古墳に影響を与えた特殊器台、特殊壺。前方後円墳では全国で4番目の規模の造山古墳(全長305m)9番目の作山古墳(286m)があり、朝鮮式山城の中でも全国屈指の鬼ノ城がある。鬼城山・標高約400mに築かれ、その城壁は2.8km、総面積30万㎡にも及び、吉備津彦命の温羅退治の伝説の地でもあるが、その築城の時期や目的はまだ解明されていない。

弥生時代から独自の文化を持っていた「吉備」が古墳時代においても力が衰えなかったのは先進的な製鉄技術と製塩と言われている。

今回は、温羅伝説に秘められた「吉備」の真実をさぐるため。鬼ノ城の現地見学と吉備津神社の鳴釜神事(釜の鳴る音で吉凶を占う)、そして古代吉備の実相に迫る上で重要な造山古墳、楯築弥生墳丘墓を訪ねます。また、秀吉に「天下取り」を決意させた高松城の「水攻め」の現場を見学する。

#### ① 鬼ノ城(パンフレット参照)



## ＜解題1＞ 「鬼ノ城」築城開始年代を解く

### 1. はじめに

古代吉備の国は、壬申の乱後（673年）ヤマト政権により備前、備中、備後そして美作に分けられたが、その中心地域は、かつて吉備中国と呼ばれ、現在の総社市、岡山市、倉敷市にまたがる地域であり、遺跡が多い。

「桃太郎」話が吉備津神社に残る「吉備津神社社記」の中の吉備津彦命の温羅伝承との共通点が多く、その歴史的な史跡も数多く残っている。この伝承はヤマト朝廷から来征したとされるイサセリヒコノミコト（またの名は吉備津彦命）や鬼ノ城遺跡にかかわっての伝承である。温羅は百濟王子であったとされ、温羅と吉備津彦とが互いに鳥や魚に変身しつつ追いつ追われつしながら決闘するが、こういう特色をもつ話は朝鮮半島には古くからあり、内陸アジアの遊牧民族を通してヨーロッパにも及んでいたという。更にこの伝承の結末する吉備津神社の鳴る釜神事の阿曾女は、女性神官が聖火を守った重要な祭祀であったとされる。

（大林太良古代吉備の伝説『古代吉備国論争（上）』山陽新聞社 1979年昭和54年）

### 2. 吉備津神社の昇進の不思議

江戸時代の考証学者、伴信友が書いた『延喜式神名帳考証』の中に、吉備津神社の位の昇格を順次記している。それによると、吉備津神社の昇進が早いことがわかる。847年、従四位下、848年従四位上、852年、四品の位を授けられ官社に列せられ、857年三品、859年二品の位を授かっている。無位から二品までわずか13年、異常な出世ぶりである。これはヤマト朝廷に、そうせざるを得ない何かがあったと思う。天慶3年（940）に一品を授けている。これは、ひとつの恐い神を祀る方法であったのではないかと思う。

平安末の民謡を収録した『梁塵秘抄』に、「関より西なる軍神、一品中山、安芸なる巖島、備中吉備津宮、播磨に広峰惣三所、淡路の岩屋には住吉、西の宮」

これは恐い神様だけ並べてある。その一つに吉備津宮が入っていることを考えねばならない。

もう一つ、同じ『梁塵秘抄』に「一品聖靈吉備津宮、新宮、本宮、内の宮、隼人崎、北や南の神客人、良みさきは恐ろしや」の歌がある。（池田弥三郎「吉備津神社昇進の不思議、吉備聖霊の謎」『古代吉備国論争（上）』山陽新聞社 1979年昭和54年）

南と北の「神客人」についてであるが、吉備津神社には、二つの随神門がある。

北には、日芸麿と夜芸麿。南には、犬飼健命と中田古名命。この四神は、いずれも吉備津彦命の家来なのである。次に「良みさきは恐ろしや」とうたわれているが、良御前（うしとらみさき）は本殿の外陣の良の方向にあり、吉備津彦に殺された温羅を祀っている。

「吉備津神社昇進の謎」の時代の政界を操っていたのは、藤原氏一族であり、不比等の『日本書紀』編纂の過程で、握造され、非難され、抹殺されていった古代吉備の王者の事実を知っていた。朝廷を操り、権謀術策を重ねて自らの一族の繁栄のみを求め、君臨してきた藤原氏一族が慌て、ふためき、隠さなければならない事実とはなにか。崇りとして恐れ祀らざるを得なかった古代吉備国王者とその事績とは何か。

### 3. 温羅伝説の「鬼の城」

壮大な山城である。築城の時代や目的について、様々な説がある。

#### （A）築城7世紀説

- ・築造法の源流を高句麗に求める神籠石系に属する特徴から、663年白村江での敗戦前夜 640年～660年、斉明朝の百濟政権の危機的状況の打開政策のための軍制により築城開始。

（出典『古代を考える吉備』鬼の城と東アジア 葛原克人 吉川弘文館、2005年）

- ・7世紀の東アジアは戦乱の時代であった。（中略）朝鮮式山城と同種遺跡の古代山城（神石系山城）が16城あり、その一つと考えられている。（総社市教育委員会文化課）

#### （B）築城5世紀説

- ・ヤマトに対抗して、戦争するくらいの時期。造山・作山古墳など、独自のものを造ってヤマトに対抗した根拠地。磐井の叛乱より一世紀さかのぼる時期。

（出典「古代吉備の国論争（下）」山陽新聞社討論鬼ノ城築城をめぐる P162 坪井清足 昭和54年）

- ・下道氏の勢力圏が危機的な様相になる時期。東からヤマト国家の勢力が及んできた時期。下道氏を中心とした勢力が総力を結集してつくったと考えられる。（同 P164～166 門脇貞二 昭和54年）

(C) 『築城期を4世紀中頃から5世紀中頃までと想定。7世紀に再使用』品川清説

(1) 築城目的と古代吉備の様子

鬼ノ城山の眼下の総社平野は農業の先進地域であった。古代、東に流れる古高梁川を灌漑水路に分流させて穀倉地帯に変えた。総社市南溝手遺跡では縄文後期の土器に靱の圧痕が認められ、土器の胎土中に稲のプラント・オパールが含まれていることが判明している。(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 107 南溝手遺跡 2 岡山県教育委員会) また、土器製作においても、先進地域である。特徴的な土器をうみだし、優れた土器製作技術は、上東式土器という、長頸壺を特徴とする上東式土器の分布圏は、岡山市南部平野を中心に、東は吉井川東岸、西は高梁川西岸(小田川流域)に限定される。この範囲こそ、後に特殊器台・特殊壺の祭儀を生み出し、最古形式の前方後円墳を生み出す母体となった。

(2) 総社平野に楯築弥生墳丘墓「弥生時代後期(3世紀後葉)」がある。

「今から約700年前、村々の長の上に君臨し、崇められていた吉備の大首長が死んだ。神霊と人間とを媒介する呪力をもった大首長の墓は、吉備平野の沃地を見晴らす丘に土を盛り上げてつくられた。円の径約40m、前後に突出部を持ち墳長約80m、円丘部の高さ約5m。深く土の中の二重の棺の中に横たわった遺体は絨毯のように厚く敷かれた深紅の朱の上に置かれ、その愛用の品であった首飾り玉飾りの鉄剣も収められた。この日のために彫られた呪的な文様の石も一つは砕かれ川原石と共に墓の埋め土の中に封じ込まれた。

棺の埋葬後、頂上の広場では、新首長が首長権と呪力を継承するための祀りが行われ、丘の上、盾のように巨石を立て、斜面に石を巡らし、特殊器台・特殊壺を据えて首長の記念物を完成させた。」楯築弥生墳丘墓の事実を3世紀に遡って再現すると、あらまし以上になるのだろうか。

調査には、全国が注目したいいくつかの特色があった。

- ア 墓構内から楯築神社ご神体石と同じ直弧文に似た古代文様の石片出土。
- イ 生の墓として初めての人形土器片の出土
- ウ 我が国、最古の暗渠排水溝
- エ 棺内に撒かれていた大量の朱、玉飾り・鉄剣など

楯築弥生墳丘墓の広さ約660㎡、大型環濠を思わせる深さ3m。幅数mの大溝が堀削されている点でも他の弥生墳丘墓に類をみない構造物である。墳頂には、高さ1.2mで呪的な効果を狙ったと考えられる幾何学模様が付けられた特殊器台とこれまで見られなかった長頭で玉葱形の胴部に三条の箍(こ)、その間に鋸歯文様が描かれるなど、通常の壺とかけ離れた作りの特殊壺が置かれた。

特殊器台そのものは、楯築墳丘墓の築造に際して初めて現われたとみられる。特殊器台は10個前後出土しているが、完品に復元できた品は1個しかない。図18 同書P42

特殊器台は、後に続く墳丘墓築造に伴って変化していく。(立板型特殊器台、向見型特殊器台、宮山型特殊器台、都月円筒埴輪)

3世紀中葉すぎに出現したと考えられる箸墓古墳(奈良県)の後円部墳頂に都月型の特殊壺、器台形埴輪が、また前方部先端の墳頂部には底部を穿孔した二重口縁の土師器壺が立て並べられていたことが知られている。

(『卑弥呼は大和に眠るか』大庭 修 P220 1999年)

「墳頂に置かれた特殊器台、特殊壺は、箸中山古墳、西殿塚古墳などヤマトの最古形式大型前方後円墳の墳頂に置かれ、それは更に抽象化を進めた円筒形埴輪として、ほぼ全土にわたる埋葬祭祀に一定の支配的役割を果たしていった。これが来るべき4世紀の前方後円墳の成立にどう関わって来るか。」

(近藤義郎楯築弥生墳丘墓 2002年吉備考古ライブラリー)

3世紀、吉備連合王国は、吉備中国を盟主にして、畿内政権と共に、列島内部の諸族間の垣根を取り払い、倭としての祭祀の統合をあらわす前方後円墳社会を作り上げようとした。豊かな創造性を持つ古代吉備が先導して、各地の首長と協議し、4世紀の前方後円墳祭祀を創造したのではないだろうか。

3世紀、楯築弥生墳丘墓の主は卑弥呼と同じ時代である。楯築の大王は卑弥呼の国と盛んな外交関係を深めたであろう。同時に朝鮮半島の国々や北九州の国と積極的な外交を持ったに違いない。

この頃の王者達は、貴重な鉄素材を、朝鮮半島弁辰(弁韓)から、北九州を経て購入し、国内の鍛冶炉で、成型加工し、農具、工具、武器、祭祀具にした。

西暦 107 年（後漢永所初 1、丁未）倭国王（倭面土国王）師升等、後漢の安帝に生口 160 人を献ずる。この頃、倭は朝鮮の弁辰（弁韓）の鉄を盛んに輸入する。（魂志韓伝）

鉄素材購入にあたり倭の交易品は、土器製塩による塩であった。「当時は島であった児島地域で土器製塩が始まるのは、弥生時代中期後半である。」（近藤義郎『土器製塩の研究』1984）その背景には余剰生産活動を生み出しうる総社平野での水稻農業生産があり、これに支えられた児島周辺の土器製塩を行う分業集団が出来た。弥生、古墳時代の上東遺跡は農耕を主とする集落遺跡であるが、製塩炉跡の焼土遺構と製塩土器の捨て場が検出されており、そこでの塩の生産量は、集落での消費量を超えるものと推定されている。

弥生時代から 5 世紀まで、塩は重要な交易品として首長の統括を受け、朝鮮からの鉄素材の購入を支えた。

3 世紀後期になると、前期古墳の副葬品には、鉄素材であると共に、貨幣的な交換価値を持つ鉄錠が大量に見られる。

### （3）狙われる「吉備」－鬼ノ城、築城へ

吉備の位置は、近畿ヤマトの鉄・銅素材輸入路の瀬戸内海を制する地にあり、吉備が、近畿ヤマトよりも、多くの鉄素材や鉄器を朝鮮半島から輸入し、大きな経済力を持っていたと思われる。吉備と近畿ヤマトとの連合関係は、4 世紀に入り、波乱が生じる。『日本書紀』によれば、4 世紀初頭、崇神天皇の時、豊かな吉備の富を狙う近畿ヤマト軍による吉備侵攻があったと考える。

（日本書紀崇神天皇十年七月「吉備津彦をもて西道に遣わす。」「同十年冬十月四道將軍、今急に発れ、…」）。

吉備王国の応戦は、鬼ノ城山、血吸い川、赤浜、矢喰宮、鯉喰神社、楯築神社等の地名、遺跡が温羅伝承に残る。（参考資料参照）

その苦い戦いの体験により、吉備中国の王（『日本書紀』では、吉備下道臣と表記）は、ヤマトの更なる支配に対抗するための根拠地として、鬼ノ城山に多くの住人が避難できる城造りを秦氏等渡来人の協力を得て開始した。

築城作業は四世紀中頃から始められ、工事は百年間にわたる。5 世紀の初め頃、河内、吉備で臣大古墳の時代を迎え、吉備では墳長 350m 全国 4 位の造山吉墳が造られ、その背後に鬼ノ城が雄大な城壁をあらわした。次いで墳長 270m の巨墳、作山吉墳が造られる。

畿内政権との協力関係が続いたにも拘らず、5 世紀中頃突如、雄略天皇の時代に、鬼ノ城工事を中止せざるを得ない事件が生じた。雄略朝 7 年 8 月（5 世紀中頃、460 年代頃か?）

『日本書紀』吉備下道臣（しもつみちおみ）前津屋天皇呪詛の罪により、物部戦士 30 名の急襲を受け一族 70 名が誅殺される。『書紀』には一方的な記述になっているが、冤罪ではないのか。

前津屋一族は、栄光ある墳墓の地を没収され、許されたわずかの遺族が辺陬な高梁川の西側に封じられ、命脈だけが継がせられることになったのであった。その高梁川の西側が、このときから、下道国造の領地となったことから、いつしか人々は、そこを下道郡と呼ぶようになったのである。その下道国造の遺族は、下道郡八田（箭田）郷に居住した。その子孫は歴史に名高い吉備真備を輩出すが、そうしたことも下道郡を、古くからの下道郡と考えさす誤りの原因となったのであろう。

そして下道国造が追放された後の高梁川東側の地は、新しく加夜（かや）国造が任命されて領域とした。加夜国造は、分家の上道国造の分家の出身者。傍系から選んで、このとき、初めて加夜国造がたてられたものと思われる。

その領域は、かつての下道国造の領地と全く一致する。そして、それ以後、この地は加夜郡と改称された。』

（鳥越憲三郎 『吉備の古代王国』 新人物往来社 昭和 49 年）

鬼ノ城は 7 世紀、白村江敗戦前後に再び使用されることになる。さて、築城期と目的を大きく分けて、(A) (B) (C) の 3 説を述べたが、さあ、皆さんの考えはどうだろうか？

古代吉備を支配しようとする近畿ヤマトとの対立は益々激しくなり、吉備上道国造に対する弾圧とそれへの抵抗がある。（『書紀』によれば叛乱と記す）雄略天皇 7 年雄略帝、吉備上道臣田狭の妻稚姫を奪う。任那に赴任していた田狭は、新羅に援軍を求めて抵抗しようとする。

清寧天皇 即位前紀 23 年 8 月 大初瀬天皇（雄略帝）逝去。吉備稚姫、その子、星川皇子を王位に就けようとして、大蔵の官をとるが殺害される。吉備上道国造、船 401 艘をもって救援に来るが、稚姫・星川皇子等の死

を知り、海路吉備に帰る。朝廷、吉備上道国造を責めて、その山部を奪う。

と。更に、近畿ヤマトは吉備に2つの屯倉を設置する。（蘇我稲目、馬子が大きく関与。）

I 欽明 16 年（555）白猪屯倉の設置－製鉄。王辰爾の甥、胆津が実務、技術面で経営。

西漢人部麻呂がいたのが賀陽郡阿蘇郷「宗部里」－6世紀後半千引カナクロ谷遺跡

忍海漢部真麻呂がいたのは賀陽郡庭瀬郷「三宅里」－窪木薬師遺跡

II 欽明 17 年（556）兎島屯倉の設置－瀬戸内海の制海権、製塩と、近畿ヤマトの支配は続いていく。

## 《解題2》 桃から生まれた……伝説を解く

### 1. 桃太郎伝説の成立は江戸期に

江戸期の赤本、豆本、黄表紙などに登場した「桃太郎」は『童蒙話赤本事始』（滝沢馬琴作）が最初である。「桃太郎」の名を日本中に広めたのは巖谷小波の『日本昔噺』である。それを戦時中に孝行・正義・仁恕・尚武・修身など徳を具体化した国民的英雄にしたが戦後民主主義の先駆とされ時代に翻弄される。芥川龍之介、尾崎紅葉、北原白秋、菊池寛なども小説の題材にし、「日本人」の真相に迫っている。根本的なメスを入れたのは、民俗学の柳田国男（角川文庫『桃太郎の誕生』）である。

桃から生まれた子を「小さ子」物語、一寸法師、かぐや姫、瓜子姫の系譜。さらに川上から流れてくる異界の「桃」から「水辺の小さ子」「海神少童」「スクナヒコ」と神話の流れを解く。柳田は異界出生の子が共同体から排除され異郷に赴くという「英雄神話」という。これに対して人類文化史的な視点から「桃太郎の母」に絞って説く石田英一郎は、その書『桃太郎の母』（講談社文庫S47年刊）は「水界の母子神」とみる。

それは、太平洋周辺の島々に伝わる浜辺に神の子を産み残していく『豊玉姫の伝承』や南風に身をさらして子を産む『女護ガ島型の説話』としてユーラシア大陸旧石器時代の文化の残照と説く。

唐木敏雄「英雄伝説桃太郎」の桃は中国伝来の桃（植物）で、不老不死の仙薬で別伝では桃を食べ突然蘇って子を産むという指摘をしている。中国の神仙思想のあらわれと説く。

### 2. 桃太郎は吉備津彦命

吉備津彦命と温羅伝説が重なって今日のような物語になったと説く郷土史家、高見茂は岡山が桃の産地であったことがインパクトになったという。桃太郎の住む所は、鬼門（東北、艮）方向であるから、退治にお供する家来は逆方向の申（猿）酉（鳥・雉）戌（犬）でなければならない。犬飼健命（吉備津神社の南随神門に祀られている）「話せばわかる」の名宰相犬養毅はその子孫。さらに雉の留玉臣命は中田名命といい鳥飼部という職能集団出身という。

猿は楽々木森彦（ササキモリヒコ）といい、足守地方の楽々福（ササフク）神社が数多くあり、「たたら製鉄」を業とする集団を斎祭ったといわれている。（出雲系砂鉄生産集団のリーダーだった）このほか香川県では、高松市の沖に浮かぶ島（女木島）が鬼ヶ島とし、犬は犬島。猿は陶村（香川県）雉は高松の「雉が谷」の住人とし、本家は香川と言っている。また、岩手では、「花見に行った父母が拾った桃から」桃太郎が生まれた物語もあり、日本各地に桃太郎伝説が語り続けられている。

《温羅伝説と桃太郎ばなし》は、藤原政権・政策上の嘘。

吉備津彦は孝霊天皇の子息ではなく、紀作成者による系図の捏造である。天皇家の子息として吉備津彦を祀らせ、ヤマトが征服した証とするという占領政策にすぎない。文字通り、吉備津彦は吉備の地元神であり、楯築弥生墳丘墓・造山古墳の祖または、子孫である。地元民を鬼に仕立てて、掬り替えた伝説づくりの時期は、いつだろうか。奈良時代に、『日本紀』が作られた時期と同じではないだろうか。悪知恵に感心する。

手法の共通性が興味深い。藤原不比等は、古代吉備王国が歴史的先進国家であることを隠し、藤原王朝の利益のために、物語を偽作して流布させた。現代にも存在する、マスコミ操作であり、嘘を真にする手法である。

しかし、世間では、俗謡として、その非を平安時代の終りまで民衆の中で謡われた。『一品聖霊 吉備津宮・丑寅みさき(御崎)は恐ろしや』梁塵秘抄より

## ② 名神大社、吉備津神社

「津」は港。かつて回廊まで海岸線があった。海からも拜むことが出来る神社であった。

神社のしおりによると、祭神は大吉備津彦大神ならびに配祀八柱の神。祭神は第7代孝靈天皇の皇子と伝えられ、第10代崇神天皇の御代に吉備の国に下られ、温羅を平らげて平和と秩序をきづき、この地に宮を営まれて吉備の国の人々のために殖産を教え、仁政を行い、長寿を以てこの地に薨去せられた。

社伝によれば仁徳天皇が吉備の国に行幸した時、創建になったもので、後、延喜式が定まるや名神大社に列し、やがて一品の位になられましたので一品吉備津宮、また三備（備前、備中、備後）の一の宮と称せられ、昔から産業の守護神としてまた長寿の守り神として全国の人々から深く信仰せられている。

本殿・拝殿の現在の建物は応永年間（1425年完成）に25年の歳月をかけての再建で室町時代初期の代表的建築であるのみでなく、比翼入母屋づくりであるが「吉備津造り」と称えられ全国唯一の形式として日本建築の傑作で国宝でもある。

南随神門・北随神門（共に重要文化財）。北随神門は室町中期の再建。南随神門は延文2年（1357）の再建で現存の社殿中最古。共に三間一戸の八足門である。廻廊（県指定）延長400m余もあり、殊に地形のままに直線にのびているのは全国にも稀な建物で著名である。

《御竈殿（重文）》釜鳴りの神事が行われている。お釜の鳴動の音の大小長短によって吉凶禍福をト（ボク）するのである。その神秘的なことは古く「本朝神社考」「雨月物語」などにも紹介されて有名である。

吉備津神社の由緒書にある配祀8柱とは、日子刺方別命、千千速比売命、御友別命、中津彦命、倭飛羽矢若屋比売命、倭迹々日百襲比売、若日子建吉備津彦命、日子寝間命であるが、吉備建国の始祖、御友別命の長子、稲速別＝下道臣の祖。次子、仲彦＝上道臣、加夜臣の祖であって、祭神、大吉備津彦大神は古代吉備一族とは無関係か。また、吉備津神社に75膳祭りあり、摂社、末社が72社ある。元々は、御友別命だけを祀っていたのではと考えられる。御友別命の名は応神紀に服属儀礼をとったとして登場している。そこには、御友別命を中心として兄弟や子が吉備国を治める形になっている。また、『新撰姓氏録』に吉備臣。稚武彦命の孫、御友別命の後なり。とある。



《解題3》 鬼ノ城、最初の主は、はたして誰か

1. 鬼ノ城は逃げ込み城（攻撃的でない）であって戦場にはならなかった。
2. 周辺に渡来系氏族との関わりのある鉄器遺跡

古代吉備における鉄器生産のはじまりは弥生時代後期後半の岡山市津寺一軒家遺跡で確認されている。しかし、渡来人との明確な関わりは不明（亀田修一氏）。

5世紀代の鉄器生産に関わる遺跡（備中地域）は次の通り。

#### I 窪木薬師遺跡

5世紀前半から7世紀前半までの200年間の鍛冶関係遺跡。伽耶地域の福泉洞21、22号墳などで出土している鉄鏃と類似した鉄鏃、そして鍛冶滓等が出ている。

#### II 随庵古墳

窪木薬師遺跡の北、約3.5kmの山麓近くに築かれた墳長約40mの帆立貝形古墳で竪穴式石室に鏃（かすがい）を使用した割竹形木棺が納められていた。遺物は、馬具、武具、農具、鍛冶具セットが納められていた。

この竪穴式石室は伽耶系の可能性大。

#### III 榊山古墳

造山古墳の陪塚。直径35mの円墳。馬形帯鉤（たいこう・バックル）を出土。多量の鉄器とともに、鍛冶具の鉄床、鉄槌、砥石が出土。そして、伽耶系陶質土器。5世紀前半。被葬者は不明。

以上の3つの遺跡がある。5世紀初めの吉備への渡来人は、396年高句麗が百済の都、漢城まで迫り、洛東江下流域まで南下している。この戦乱をさけるために列島、そして吉備に渡ってきたものと考えられる。

また、鬼ノ城眼下の西阿曾（阿曾＝噴火で山頂が赤々としているところ）に水城があったのではと考えられる。（鬼ノ城学芸員の話、住戸10軒ほど並んでいる）鬼ノ城の麓は、現在より海岸線に近く、肥沃な土地で稲作に

適し、製鉄に必要な大量の薪、水にも輸送にも恵まれ、そして砂鉄が多く採れた美作（4世紀後半の直径60mの円墳、月の輪古墳、鍛冶屋谷たたら遺跡がある。）にも遠くなかった。

「真金吹く吉備の中山」というのは、鬼ノ城、阿曾から吉備津神社辺りをさすのと考えられる。

以上、推測の域を出ないが、5世紀前半、鬼ノ城最初の主は、渡来系の鉄器製造技術集団と考えられる。

直木孝次郎氏は、『6世紀後半以後は、「備中国大税負死亡人帳」天平11年（739）によって備前、美作の鉄は泰氏系、備中の鉄は漢人系の人々によって行われた』と推測している。また、1999年に鬼ノ城ビクターセンターが確認調査を行い、礎石建物群の様相や鍛冶関連の遺構の存在を明らかにしている。

なお、高梁川上流、総社市秦村福谷に姫社（ひめこそ）神社、その東方に生石神社がある。上記の古墳はこれら神社に近接している。

#### 《解題4》 「吉備津彦信仰」とは

古代吉備は、弥生時代、古墳時代をとおして自然に恵まれた肥沃な土地で豊かな生産力を誇っており、そこへ渡来系鉄器製造技術集団が移住してきた。稲作と製鉄と製塩そして瀬戸内海の制海権を握り、近畿ヤマトとは対等な関係（それ以上か）の中、吉備の文化、祭祀形態をヤマトに持ち込んでいたのではないかと考えられる。特に、祭祀形態でいえば、特殊器台、特殊壺だけでなく、ヤマトの中山大塚古墳などの竪穴式石室墳墓以前に楯築古墳は木槨木棺の竪穴式石室墳墓を造っていた。また、「吉備津彦命」を祀るといわれている中山茶臼山古墳（古墳時代前期、前方後円墳）は、姉を祀るといわれている箸中山古墳（箸墓古墳）と形式を同じくし、墳丘は、古墳時代前期中頃の行燈山古墳（伝崇神陵）の2分の1相似形という意見もある。さらに、また、3世紀後半から4世紀にかけて、内行花文鏡1、画文帯神獸鏡1、三角縁神獸鏡11など銅鏡多数が出土した備前車塚古墳、特殊器台が出土している黒宮大塚古墳（60m）など、東日本で多くみられる前方後方墳が出現している。

『日本書紀』には崇神10年（絶対年代は不明だが、213年か）、四道将軍を地方に派遣したと記されているが、崇神天皇の存在自体が不確かで吉備に派遣された五十狹芹彦とは何だろうか。

吉備津神社の祭神が、「②吉備津神社」で記したように五十狹芹彦（いさぜりひこ）「吉備津彦命」ではないなら、真の祭神は「御友別（みともわけ）命」と考えられる。御友別命は、古代吉備一族の祖神であって、上道、下道、笠、賀陽、三野などの臣の姓を持つ有力豪族がでている。雄略記による5世紀後半の「吉備の反乱」について不思議なことは、ヤマトの「雄略」勢力が吉備勢力を凌駕していたということ。物部の兵士30名で勝利したとはどうしても信じがたい。吉備一族内の内部対立、相克があり、下道臣、上道臣が衰退していったのであろうか。下道国造の領域（本貫地）が加夜国造の領域にそっくり入れ替わった事実から考えてみると、吉備津神社の祭神、「大吉備津彦大神」は下道国造の『崇り』を恐れた「賀陽氏（神主を世襲）」が崇り神を封じるために「御友別命」から入れ替えるために創られた神として祀られ、温羅の怨霊信仰と結びつき各地に「おんざき」「御前神社」が建立されたと思われる。吉備津神社名25社をはじめ、良神社、御崎神社（または御前、園崎神社）など「吉備津系」神社が、岡山を中心に鳥取、島根、香川、愛媛など300社を数える。（注「みさき」一神様が巡行する時、前を歩く神。）また、岡山には温羅だけを祭神とする乾御前神社、箭取御前、龍神社などがある。

温羅信仰がヤマトとの関係、政治的な関係で、「吉備津彦」信仰になったとも考えられる。

しかし、吉備津系神社の広がりや吉備の独自の豊かな文化、製錬や鉄器文化圏の広がりでもあったと言える。

#### ③ 楯築弥生墳丘墓

全長約80m。弥生時代では最大の墓といえる。中央に円丘部、そして突出部が二つある。古墳の場合双方中円墳と呼ぶようである。円丘頂部には5個の立石が見られ、斜面にも列石が配されていた。

- (1) 御神体の石彫品。伝世弧帯文石（収蔵庫の窓から見る）全面に弧状の帯をなす線刻模様のデザインが施されている。このデザインは吉備独特であり、特殊器台・壺・陶棺に施されている。
- (2) 巨大な立石5個。大は地表から3m、小でも2m近くある。弥生時代に類をみない『聖域』区画の大土木工事である。
- (3) 埋葬施設、円丘部のほぼ中央の地表下に主人公の埋葬が発見された。それは、墓穴、木郭・木棺からなり、

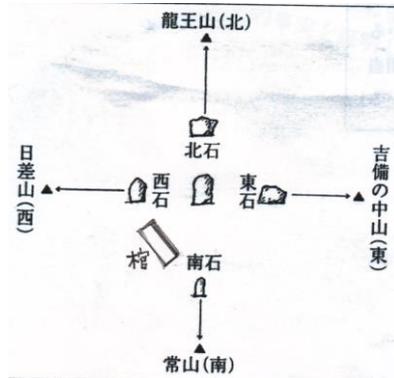
木棺の底には純度良好な朱（水銀朱）が厚く敷かれ、総重量は 32 kgを超える。（水銀朱は高価である）

(4) 副葬品頸飾りは、1 個の勾玉と 1 個の瑪瑙製素（なつめ）玉を中心に 27 個の碧玉製管玉からなる。玉類は他にも 2 組あり、鉄剣 1 が置かれていた。

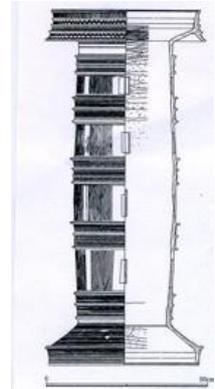
(5) 祭祀に使われた土器特殊器台、10 前後。特殊壺、10 前後。他、多数特殊器台そのものは吉備で、おそらく楯築弥生墳丘墓の築造に際して初めて現れたとみられる。



<伝世弧帯文石>



<巨大な立石5個>



<特殊器台>

☆木槨構造の重厚な作りと、そのなかに収められた朱の莫大な配置には驚くべきものがあり、いまのところ、他の弥生墳丘墓の追隨を許さないものがある。莫大な量の、しかも純度の高い朱層に横たえられた人物が弥生時代後期後葉において祭祀的・社会的に卓越した存在であったことは確かである。

この重大な遺跡が、新たなる全国的な「前方後円墳の成立」に深く関わってくる。

※歌人が、『真がね吹く吉備の中山』と詠むが、朱は多くあれども、鉄鉾石は皆無である。

#### ④ 造山古墳

5 世紀の初め、日本列島で最初最大の前方後円墳『造山』、墳長 360m の墳丘上に登り、阿蘇凝灰岩製の石棺に触れてみよう。阿蘇山の麓、有明海の『吉野ヶ里』は、ハイテクの地であり、中国史書に記されている倭国の主要部分である。九州倭国と古代吉備王国との親密な交易実態を阿蘇凝灰岩製の石棺は物語っている。

この後、吉備王国の巨墳『造山』と競争するかのようになり、河内に大仙古墳のような、巨大前方後円墳が造られる。『造山』の南西にある楯築弥生墳丘墓は、『造山』の主の祖に当たる人の墳墓であろう。

#### ⑤ 史跡高松城跡

今から約 440 年前の天正 10 年（1582）織田信長の命を受け羽柴秀吉は、3 万の大軍をもって毛利方の諸城を次々と攻略するとともに、備中高松城を攻めた。秀吉は、深田や沼沢の帯にかこまれた人馬進み難い要害の城、高松城を戦史にも稀な水攻を断行し、兵糧攻めにした。3 千 m に及ぶ堤もわずか 12 日間で 5 月 19 日に完成させ、時あたかも梅雨の頃で、増水した足守川の水を流し込み、たちまちにして 188ha の大湖水ができ城を完全に孤立させた。城主、清水宗治が尊敬されているのは、「温羅のこころ」と共通するものを感じてのことか。

6 月 2 日の未明、信長が明智光秀に討たれた。いわゆる「本能寺の変」。秀吉に「天下人」の千載一遇のチャンスが訪れた。信長謀殺の犯人は果たして光秀か秀吉か。



○参考資料1 吉備津彦命と温羅民間伝承

<p>1. 崇神天皇（垂仁）の時代に温羅（吉備冠者）という百濟の王子が吉備国に飛来した。ランランと輝く目と燃えるような赤い髪とひげ。温羅の城を「鬼ノ城」と呼び、凶悪な鬼神と恐れた。</p>	<p>鬼ノ城は、吉備高原南端にあり、標高400mの古代朝鮮式山城。今は総社市。かつては、備中国賀陽郡阿曾郷と呼ばれていた。</p>
<p>2. 朝廷は、吉備津彦命に討ち取れることを命じる。吉備の中山に陣取り、西の片岡山に防戦用の石楯を築いた。</p>	<p>楯築（たてつき）弥生墳丘墓の墳頂列石 円丘、40m南北突出部、高さ4～5m。特殊器台、特殊壺、亀石、弧帯石 楯築神社一片岡多計留命。 中山の頂上に吉備津彦命の墓、中山茶臼山古墳（全長130m）がある。</p>
<p>3. 戦闘。吉備津彦命の射た矢と温羅の射た矢が空中であたり、海に落ちた。両者の力量は互角。</p>	<p>矢喰天満宮一岡山市 吉備武彦命、吉備冠者又は、温羅命</p>
<p>4. 命、一計を案じた（ ）。温羅の左目に命中する。</p>	<p>足守川に注ぐ血吸川 総社市から流れる</p>
<p>5. 温羅、雉となって山中に逃げる。命、鷹となって追いかける。今度は、温羅が鯉と化し大雨を降らせて血吸川に逃げる。命、（ ）になって、その鯉を噛みあげる。</p>	<p>鯉喰神社一倉敷市 温羅命、楽々森彦命</p>
<p>6. 温羅の首を刎ねて串に刺してさらした地が、首村。その首が何年経ってもうなり続けた。命は犬飼武に命じ、首を喰わせたが、髑髏は吼え続けてやまない。やむなくその髑髏を吉備津宮の釜殿の下、2.5mに埋めたが、なお、13年間うなり続けた。</p>	<p>首村一岡山市 吉備津神社一釜殿、扁額に「平賊安民」 矢置石</p>
<p>7. ある夜、命の夢枕に温羅が現れ、「妻の阿曾媛に神饌を炊かしめよ。世の中にもし事あれば、かまどの前に来るがよい。幸いあれば、かまどは豊かに鳴り、禍があれば荒々しく鳴る。」</p>	<p>吉備津神社の鳴釜神事の起源 阿曾女と呼ばれる巫女が朝夕の神饌を作る。神官と巫女とで神事を催す。釜の鳴る音で吉凶を占う。</p>

○参考資料2

「穹堂が雄弁は珠玉を盤上に転じ、木堂が演説は霜夜に松籟を聞く」と評された犬養 毅首相が、昭和6年2月19日、歴史学者の矢尾孝治氏にあてた手紙を残している。そこには、

『……加夜氏は往古は神官の首長なりし賀陽氏にて、即ち栄西禅師の出でられし家也。……青江鍛冶は、極めて古し。後鳥羽院の御宇已に名工を出し、其流派は備中各地に在り。萬寿庄の如きも其一也。

温羅は朝鮮族（原文ママ）なるべし。吉備彦の征討せられし賊首也。温羅命に関し、老生の臆説あり。本邦刀剣鍛冶の最古のものは、天一眼（あめのひとつめ）、天真浦（あめのまうら）、川上部也。老生の臆断は左の如し。最初の鍛冶術は三韓より伝来したり。天の某と称する海外人なるは、彼の書籍を伝へたる天日槍の韓人なるに徴しても明なり。而して本邦の鉄は山陰山陽の山脈より砂鉄を採りたるが最も古し。故に刀剣に川上部あるは、今の川上郡の砂鉄を刀剣に製作したる也。天一眼、天真浦は韓より来りし鉄工也。真浦は即ち温羅也。製作所の技師長が富を致し、勢力を生じたるより、本国人を率ひて叛き、中国に蟠踞したるなるべし。あまくに刀剣最古の天国（あまくに）は一人にはあらず、天国より来りし鍛冶との意なり。』と。（昭和7年5月15日犬養 毅首相死去、享年77才）。



